

## 丸山と中国の近代的思考の模索

### ——私の世代の体験を中心に——

區 建 英

ご紹介いただきました區建英でございます。ここで報告する機会を与えていただき、大変光栄に存じます。よろしくお願いいたします。限られた時間には限られた内容しか話せませんが、ここで私は主に自身の具体的な体験に基づいて話したいです。中国の近代的思考の模索と関連して丸山眞男先生を語りたいと思います。内容は三つのテーマに分けます。

第一点は、丸山眞男先生と問題意識を共有したことです。

丸山先生の思想史学に関心を寄せた背景には私自身の時代的体験がありました。それは主に私の少年少女時代から経験した一〇年間の文化大革命（一九六六―七六年）です。まず、その時代の問題を簡単に説明したいです。私は新中国に生まれた者ですが、親の世代はかつて帝国主義列強との戦い、および内戦の苦しみを経験しましたので、彼

らは中華人民共和国の誕生をととても熱烈に歓迎し、この新中国はかつてない繁栄で民主的な社会になるだろうと非常に楽観的に期待しました。しかし目の前に展開された現実は人々の希望を次第に崩してしまいました。多分年輩の方はお分かりと思いますが、反右派闘争（一九五七―五八年）に続いて文化大革命が起りました。文化大革命が始まったころ、私は小学生で、自分の親類や学校の先生を含めて多くの良い人が打倒され監禁され、また仏教の寺や孔子廟などが破壊され、その有様を目の当たりにしてとても悲しかったのです。なによりもショックなのは、加害を行った人も普通の良い人だったということです。文化大革命は一〇年間も持続して私の頭に蓄積したもつとも深刻な記憶は、知識人弾圧によって社会の良識が消されていったことでした。

親の世代は新中国の成立を偉大な革命として、その明るい前途に強

い期待を託しましたけれども、これに対して、私の世代が見たのは、再び暗愚な状態に陥った新中国でした。文化大革命は全人民参加という民主的な外観を見せましたけれども、大勢の大衆が良識ある人への迫害に参与しました。これが民主的だというなら、あまりにも皮肉です。また文化大革命が終わるころ、人びとは独裁政治を批判する文章を多く発表しましたが、人民自身の問題としては、社会主義イデオロギーに飾られた権威への絶対信仰によって自分の思考を停止していたというような問題については、必ずしも反省していません。私は苦悩の中で次のような疑問が頭に浮かんできました。あの「偉大」と思われる中国革命は一体何が未完成なのでしょうか。私は歴史研究によってその解答を求めたかったです。

後に中国は改革開放時代を迎え、私もおかげさまで大学に入れましたが、大学二年の頃、わが大学に来ていた日本人教員が丸山先生の『日本の思想』を薦めまして、私はそれを読みました。これが丸山先生の著作との最初の出会いです。この著作は、日本の思想を全体的に捉えて分析し、さらに歴史へ遡ってその中で執拗に繰り返されてきた思想継承のパターンをえぐり出し、日本の精神構造の欠陥や病理を診断し、その病理の構造的な原因を突き止めました。この著作から私はとても新鮮な衝撃を与えられ、とくに二つの面で感銘を受けました。

第一は日本の精神構造に対する丸山先生の分析と解剖の徹底さです。それは日本人の自己批判としては心臓部に迫るような手術です。その解明されたものに日本人自身が直面して辛く感じるかも知れませ

ん。しかし自国民を賞賛ばかりしている歴史学に比べて圧倒的に優れた価値があると私は感じました。丸山先生はこの仕事によって、「これまでいわずに背中中ブルブルとひきずっていた「伝統」を前に引き据えて、将来に向っての可能性をその中から「自由」に探っていける地点に立ったように思われた」と述べています（『日本の思想』岩波新書、一九六一年、一八七頁）。ここには、真摯な改革者の非凡な勇気が現れています。

第二は方法として、現在に接続する過去の思想史を構造的に捉える事によって、今日の問題の歴史的由来と深層な原因をつかむ、そういうところにごく魅力を感じました。中国の歴史学は、司馬遷をはじめ歴史の史実を記載することによって後世に教訓を残すという伝統がありますけれども、主に歴史的現象の記述です。しかし丸山先生の方法を通じて、私は思想史の軌跡をたどってそれを構造化することの重大な意味を認識しました。そして文化大革命の独裁と大衆運動が結び付けられた構造の背後にも思想史の深い構造的な原因があるとひらめいたのでです。

『日本の思想』という著作に述べられたのは日本の問題ですけれども、そこに表れている叡智は中国の歴史的省察にとっても貴重な価値があると思います。だから、私は自分も一般の歴史学ではなく、思想的な方法によって自国の問題を深層から解明したいと考えるようになりました。

後に大学院に進学して明治維新史を専攻とする北京師範大学の教授

の門下に入ったのです。そこで、『戦中と戦後の間』（みすず書房、一九七六年）という本を読んで、丸山先生の福沢論吉論にはじめて接触しました。最初に読んだのは「福沢論吉の儒教批判」で、福沢が一生を通じて儒教と戦うと丸山先生が論じましたが、この点に少しとまどいを感じました。というのも、儒学を激しく批判する文化大革命を私は経験したばかりです。しかし福沢が敵とした儒学を直ちに中国の儒学と同一視しないで、この論文が書かれた背景としての戦争時代の文脈を理解しますと、重要な発見を得ました。日本全国民が天皇中心の「国体」のための戦争に動員された体制のもとで、丸山先生が問題視したのは、個人が主体的に自分を修養するような儒学ではなく、五倫五常の儒教徳目が日本社会に染みついて一種の思考様式あるいは行動様式になっているという精神構造です。これが独立自尊の市民精神を妨げているからです。この論文を読んで私自身も、儒教のこうした浸透の仕方に深刻な問題があると意識し、中国にはどのような浸透の仕方をしたのかを真剣に考えはじめたわけです。

この論文に続いて読んだのは「福沢に於ける秩序と人間」という短い論文でした。ここで福沢の思想の精髓が丸山先生の「音楽演奏家」としての力量によって奏でられ、私に強い共鳴を呼び起こしました。ここで丸山先生の思想の核心部分を見たような気がしました。特に共感を覚えたのは、「国民の大多数が政治的統制の単なる客体として所与の秩序にひたすら「由らしめ」られている」という問題に関する丸山先生の指摘です。また福沢の独立自尊の意味は、「秩序を単に外的

所与として受取る人間から、秩序に能動的に参与する人間への転換」を図ること、「個人の自主性」「自主的人格の精神」を樹立することにあるという先生の分析に、私は深い感銘を受けました。自国のことを考えますと、中国の文化大革命は熱烈な大衆運動として現れましたが、実は人びとが自分の思考を停止して権威に従いました。だからこそ、そのような愚行が社会全体に発生したと私は思うようになりました。この意味で、「独立自尊」の市民精神の樹立が中国にとって未完成的な課題だと私は意識し、この点で、私も丸山、福沢と問題意識を共有することが出来ました。

第二点は、丸山思想史学と私の方法的転換です。

中国が改革開放に入ってから間もなかったころ、歴史学は依然としてマルクス主義史学の方法論に堅く固執し、ほとんど信仰的あるいは公式主義というありさまでした。従って、私の研究は自分が希望する思想史のようにならず、一般の歴史学、しかも唯物史観の土台論に基づくようにルールを敷かれていました。その方法によると、歴史上全ての政治と精神の現象があらかじめ生産様式と生産関係の発展によって規定され、いかなる思想も結局、物質的基盤に伴う必然的な結果に過ぎないように解釈されてきました。そのころの中国の福沢論には一つの決まったパターンがありました。唯物史観に基づいて、近代日本を封建的要素の濃い資本主義、さらに帝国主義へと発展した社会として捉え、その中で福沢を含めた明治の思想家も皆、不徹底な啓蒙思想から

はじまり、保守的、反動的な思想へと変わったのだと解釈していました。要するに、近代日本の現実における成功も失敗も、進歩も反動も、思想が歴史的現実の必然的反映にすぎないというように解釈されます。人間が主体的に考えて現実と対決するという、つまり思想それ自体の価値を見出すことが難しいのです。このような唯物史観は意外と観念的で、実際にある人間の主体的な思考を無視しています。このままでは、私は丸山先生と共有した問題意識からの模索が行き詰まっていると感じて、唯物史観から脱却しようと試みました。しかし中国にいたころのその時代の知的環境では、この脱却は難しかったのです。

修士卒業後、日本に留学し、東京大学の大学院に入りまして、ようやく新しい知的環境が得られました。その間、幸いにも一九八七年丸山先生本人に出会う機会に恵まれました。東大博士課程に入ってもなく、安東仁兵衛さんという方が私の福沢に関する論文を丸山先生に渡したところ、先生は是非この留学生に会いたいとおっしゃいましたので、吉祥寺の喫茶店でお目にかかり、数時間にわたって福沢論吉と日中近代思想について話し合いました。その後、丸山先生は「私は區さんの個人的な指導教官になります」とおっしゃいました。予想外のことで私はとても感激し、本当に直接指導していただけたことは大変幸運に思います。

その後、私は福沢研究を中心に唯物史観の脱却を試みました。丸山先生はかつてマルクス主義、とくにその法則的思考を受け入れ、活用もしていました。その方法を手掛かりとして、日本思想の社会的基礎

を分析していました。けれども実践の中でマルクス主義の限界性とかいろいろな方法論の問題に気が付かれまして、それを乗り越えました。先生のマルクス主義体験も私への重要な啓発でした。私は近現代中国の福沢理解を整理する作業から着手して、唯物史観から自由になるように努力しました。これに関する論考を書くとき、丸山先生は何回も私と平等に討論し、とても貴重な助言も与えて下さいました。私の方法論的解放に非常にためになったと思います。(後略)